

複数のテキストから情報を取り出して活用する力を育む評論の授業の工夫 — 個—協働—個の学習活動による思考の深化を通して—

長期研究員 武藤 文恵

《研究の要旨》

本研究では、評論の授業で、複数のテキストから情報を取り出し、それらを関連付けて活用する力を育むことをめざした。授業では、生徒に複数のテキストを関連付ける視点を明示し、個—協働—個の学習活動の中で、その視点を運用して課題を解決させた。考察の結果、複数テキストの関連付けに必要な視点を明示して運用させることは、生徒の「複数のテキストから情報を取り出して活用する力」を育むことが分かった。

I 研究の趣旨

テキストの内容を深く理解するには、テキストから取り出した情報と既有知識や経験、ときには他のテキストの情報とを関連付けて解釈することが必要になる。

ところが、私自身の授業を振り返ると、生徒はテキストの情報を既有知識や経験などと関連付けて解釈することが苦手であると実感させられる場面が多々あった。特に、評論の授業において、それが顕著であった。

そこで、このような生徒の傾向を踏まえ、解釈の質を高めるために、複数のテキストを活用することを考えた。生徒にとって抽象度の高い評論を既有知識や経験などと関連付けて解釈するのは、容易なことではない。したがって、まずは教科書教材と他のテキストという複数のテキストから情報を取り出し、それらを関連付けて解釈し、アウトプットするという課題を解決させる授業を試みることにした。

しかし、複数のテキストから情報を取り出すだけではなく、それらを関連付けて活用することは、生徒には負荷が大きいと予想された。

そこで、協働的な学習の機能を生かし、個—協働—個の学習活動を設定することにした。協働的な学習を通して他者の考えにふれることで、各自の考えが深化すると考えたからである。考えが深化すれば、学習課題の解決も促される。また、多様な考えにふれ思考が深化した経験が、生徒に多角的に考えることの有用性を実感させ、その結果、各自の中に多様な見方・考え方が醸成されていくと考える。

以上のことから、協働的な学習を取り入れた、「複数のテキストから情報を取り出して活用する力」を育む評論の授業について研究することとした。

II 研究の概要

1 研究仮説

評論の指導において、以下の手だてを講じれば、生徒

の「複数のテキストから情報を取り出して活用する力」を育むことができるであろう。

【手だて1】複数テキストの関連付けに必要な視点の明示

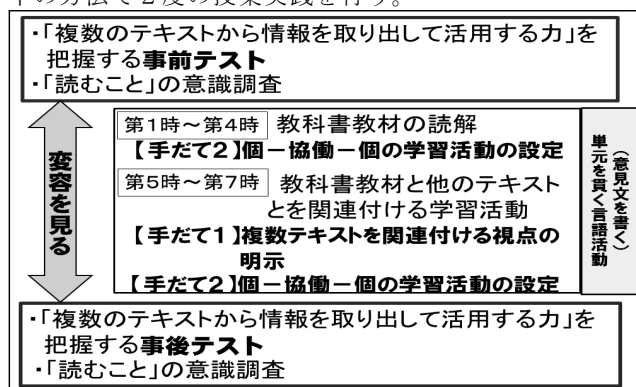
【手だて2】個—協働—個で課題を解決する学習活動の設定

なお、本研究における「活用する力」は、「テキストから取り出した情報を関連付けて解釈し、意見を述べる際に根拠や理由として利用する力」とする。また、これと区別し、習得した知識・技能を活用することは「運用」と表記する。

2 研究の方法と内容

(1) 研究の方法

研究協力校の第1学年2クラス(82名)を対象に、以下の方法で2度の授業実践を行う。



① 検証の方法

事前・事後テストの評価及び事前・事後の意識調査の結果を比較し、生徒の変容を見る。

テストは、教科書教材の内容とは関連性のない複数テキストを用いて意見文を書くものとする(ただし、多読に対する生徒の抵抗感を軽減するため、事前・事後テストで使用するサブテキストは同じものとする)。評価は、「平成27年度全国学力・学習状況調査解説資料 中学校国語」を参考にして作成した解答類型を基に行う。

② 単元の概要

教科書教材と他のテキストから取り出した情報とを関連付けて意見文を書く活動を、単元を通して位置付ける。

これにより、教科書教材の読解や教科書教材と他のテキストとを関連付ける学習活動が、意見文を書くという目的に向かってつながり、生徒の目的意識を持続させることができると考える。

なお、教科書教材と関連付けるテキストは、主に研究協力校で採用していない教科書から探した。教科書であれば、難度も見極めやすく、同じテーマのテキストや同じ筆者の別のテキストなどを見付けやすいからである。

(2) 手だての内容

① 【手だて1】複数テキストの関連付けに必要な視点の明示

先行実践等から、複数のテキストから情報を取り出し、それらを関連付けて活用することを目的として読む場合、以下に挙げた4点に着目する必要があると考えた。

- 文章の大まかな内容をとらえる
- 文章の構造をとらえる
- 共通点・相違点に着目する
- キーワードに着目する

そこで、教科書教材と他のテキストとを関連付ける学習活動の際に、この四つの視点を生徒に明示し、運用させることとした。

また、その前段階で行う教科書教材の読解でも、上記の四つの視点のうち二つを意識させる。初読時には、文章の大まかな内容を

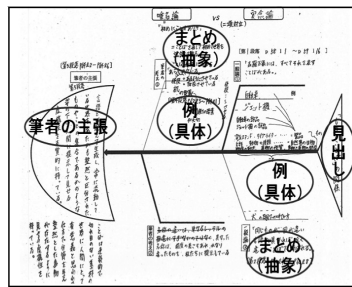


図1 教科書教材の構造を

を工夫する。精読時には、可視化したワークシート文章の構造をとらえさせるために、可視化する。その際に、思考ツールの一つであるフィッシュボーンを基にして作成したワークシートを用いる(図1)。

② 【手だて2】個-協働-個で課題を解決する学習活動の設定

他者の考えにふれることで各自の考えを深化させることを目的として、協働的な学習を設定する。まず、個人で課題に取り組みさせた後、ペアやグループで話し合いをさせ、その後、再び個人で課題に取り組みさせる。

教科書教材の読解では、まず個人で、フィッシュボーンを基に作成したワークシートを使って、文章の構造を可視化させる(図1)。次に、その構造図を基に、文章から取り出した情報やその解釈をペアやグループで共有させる。そして、共有したことを踏まえて、個人で構造図を完成させる。

教科書教材と他のテキストから取り出した情報とを関連付けて意見文を書く学習活動では、まず個人で、フィッシュボーンを基に作成したワークシートを使って、意

見文の構造図を作らせる。次に、その構造図を基に、根拠や理由についてペアやグループで話し合わせる。そして、話し合いを踏まえて、個人で意見文を書かせる。

3 授業実践の実際

(1) 実践I 教科書教材「ものことば」(鈴木孝夫)

6月下旬から7月中旬にかけて、以下の指導計画で授業実践を行った。

時	学習活動 ・事前テスト・アンケート	単元を貫く言語活動
1	第7時までの学習の見直しをもつ。 目的に応じた読み方があることを知る。 授業者による「ものことば」の読解を聞き、筆者の主張が書かれた一文を探し出す。	「ものことば」の関係性について、筆者の主張に対して、意見文を書く。
2 3 4	筆者の主張と具体例を区別して、「ものことば」を構造図(フィッシュボーンを基にして作成したワークシート)にまとめる。 ① 個人で取り組む。【個】 ② ペアになって話し合う。【協働】 ③ 個人で取り組む。【個】 ④ 全体で確認する。	
5	意見文の根拠として他のテキストの情報を用いるために、複数テキストを関連付ける視点について学習する。 「ものことば」の関係について書かれた筆者の主張に対して、自分の意見をもつ。【個】 自分の意見の根拠となる部分を、他のテキストから探し出し、意見文を書くための構造図(フィッシュボーンを基にして作成したワークシート)にまとめる。【個】	
6	ペアになって意見と根拠を交換し合う。【協働】(相手を替えて2回) 話し合いを基に、自らの意見とそれを支える根拠を再構成する。【個】	
7	意見文を書く。【個】 意見文の相互評価をする。 教科書教材を踏まえ、自分の時間についての考えを書く。 単元を通しての振り返りをする。	
	事後テスト・アンケート	

単元を貫く言語活動には、「ものことば」の関係性について書かれた筆者の主張に対して意見文を書く活動を位置付けた。その際に使用するテキストは、教科書教材と同じテーマを扱った三つの評論(樺島忠夫「語と意味」・野元菊雄「言語は色眼鏡である」・福嶋隆史の文章)とした。

第6時には、個人でまとめた意見文の構造図を基に、ペアで意見と根拠を交換させた。その際に、「根拠が意見を支えるものとして適切か」「根拠は教科書教材との共通点に着目したものか、相違点に着目したものか」という観点を提示し、意識させた。また、気付いたことを記入させる付箋を用意した。意見や根拠の「よい点」を桃色の付箋に、「疑問点」「見直したらもっとよくなると思われる点」を青色の付箋に記入し、相手に渡すこととした。この活動を、ペアを替えて2回行った。その後、個人で付箋の指摘を基に意見と根拠を再構成させた。そして、その構造図に基づいて意見文を書かせた。

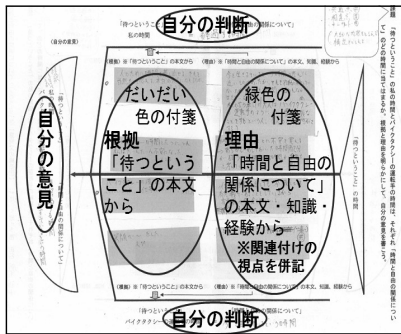
(2) 実践II 教科書教材「時間と自由の関係について」(内山節)

10月に、以下の指導計画で授業実践を行った。

時	学習活動 ・事前テスト・アンケート	単元を貫く言語活動
1	第7時までの学習の見直しをもつ。 授業者による「時間と自由の関係について」の読解を聞き、概要をとらえる。 教科書教材を踏まえ、自分の時間についての考えを書く。	「待つ」と「私の時間」と「バイクタクシーの運転手の時間」が教科書教材のどの時間と当てはまるかに判断し、意見文を書く。
2 3 4	段落ごとに精読し、「時間と自由の関係について」を構造図(フィッシュボーンを基にして作成したワークシート)にまとめる。 ① 個人で取り組む。【個】 ② ペアやグループで話し合う。【協働】 ③ 個人で取り組む。【個】 ④ 全体で確認する。	
5	複数テキストを関連付ける視点について学習する。 「待つということ」「私の時間」と「バイクタクシーの運転手の時間」が教科書教材のどの時間と当てはまるかについて、根拠を基に考え、意見文を書くための構造図(フィッシュボーンを基にして作成したワークシート)にまとめる。【個】	
6	「待つということ」「私の時間」と「バイクタクシーの運転手の時間」が教科書教材のどの時間と当てはまるかについて、根拠と理由に着目して、グループで話し合う。【協働】	
7	妥当性のある根拠・理由を選択し、意見文を書く。【個】 意見文の相互評価をする。 教科書教材を踏まえ、自分の時間についての考えを書く。 単元を通しての振り返りをする。	
	事後テスト・アンケート	

意見文を書く際に使用するテキストは、随筆「待つということ」（角田光代）とした。そして、「待つということ」の時間が「時間と自由の関係について」におけるどの時間に当てはまるか判断して意見文を書くという言語活動を、単元を貫いて位置付けた。

意見文を書くための構造図は、以下のように、2色の付箋を使ってまとめることとした（図2）。その際に、「理由」を書く緑色の付箋に、複数テキストを関連付ける



る視点の中で運用したものを併記させた。まず、個人でまとめさせ、第6時にその意見文の構造図を基に、3～5人のグループで根拠と理由に

ついて話し合いをさせた。その際、「どこから?」「なぜ?」と質問し合ったり、一緒に考えたりして、各自の根拠や理由をより妥当性のあるものにすることを意識させた。その後、個人で妥当性が高く意見文に活用できると考えられる根拠と理由を選択させた。そして、その構造図に基づいて意見文を書かせた。

4 結果と考察

事前・事後テストの結果を比較したところ、実践Ⅰ・Ⅱともに、生徒の「複数のテキストから情報を取り出して活用する力」が向上したことが確認できた。実践Ⅰでは、複数のテキストから取り出した情報を根拠として適切に活用して自分の意見を書くことができた生徒が、16%から45%に増加した。実践Ⅱでは、他のテキストから取り出した情報を意味付けし、根拠や理由として適切に活用して自分の意見を書くことができた生徒が、31%から65%に増加した。

これは、授業で複数テキストを関連付ける視点を学習して運用したことが、別の複数テキストで実施した事後テストに生かされたためだと考えられる。意識調査では、「文章の構造をとらえる」こと、複数テキストの「共通点・相違点に着目する」ことへの意識の高まりが確認できた。つまり、【手だて1】が有効であったということである。

ただし、実践Ⅱで行った、運用した視点を併記させる方法については、さらに検討が必要である。授業では運用した視点を併記していない生徒も見られたため、その要因を探り、それを解消するとともに、生徒のメタ認知に利する可視化の方法を工夫しなければならない。

また、授業中の話し合いの様子やワークシートの記述からは、協働的な学習によって生徒の思考が深化したことも確認できた。

さらに、意識調査からは、実践Ⅰ・Ⅱともに、生徒の評論の授業に対する意識がより主体的なものに変容したことも確認できた。意識調査等の自由記述によれば、その要因は個一協働一個で課題を解決する学習活動にあると考えられる。協働的な学習を通して自ら課題を解決する学習活動は、生徒の主体性を引き出すことにも有効であることが分かった。

協働的な学習の成果が事後テストの結果に反映したかどうかを直接検証することはできないが、上記のように、思考の深化や主体性の向上という点では、【手だて2】も有効であったと考えられる。

ただし、協働的な学習を取り入れる際には、グループの人数や必要感のある課題などの検討が不可欠である。実践Ⅰでは話し合いが形式的なものになっているペアも見られたため、効果的な話し合いを促す適切な場面設定や介入について工夫しなければならないと考える。また、継続的に話し合いの場を設定していくことも必要である。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 複数テキストを関連付ける視点を明示し運用させることの有効性

生徒に複数テキストを関連付ける視点を明示し、それを運用させる授業は、生徒の「複数のテキストから情報を取り出して活用する力」を育むことに有効であることが分かった。まずは、授業者自身が生徒が課題を解決する際に必要となる視点や方略を明確にすること、そして、それを生徒に明示し、課題解決を通して有用性を感じさせることが重要である。

(2) 個一協働一個で課題を解決する学習活動の有効性

個一協働一個で課題を解決させる授業は、生徒の思考を深化させるだけでなく、主体性を向上させることにも有効であることが分かった。

2 今後の課題

(1) 複数テキストを関連付ける視点を効果的に運用させる可視化の工夫

複数テキストを関連付ける視点をどのように運用しているか生徒がメタ認知できるように、可視化を工夫する。

(2) 協働的な学習の効果を高める工夫

グループの人数や分け方・必要感のある課題などについて検討しながら、継続的に場を設定していきたい。